

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 6 月 13 日現在

機関番号：32617

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2011～2015

課題番号：23520242

研究課題名(和文) 覚一本『平家物語』の遡行と伝播・受容についての基礎的研究

研究課題名(英文) An investigation of the history, propagation and reception of the Kakuichi-bon Heike monogatari.

研究代表者

櫻井 陽子 (SAKURAI, Yoko)

駒澤大学・文学部・教授

研究者番号：60211934

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,500,000円

研究成果の概要(和文)：『平家物語』には多くの異本があり、その本文は流動しているが、例外的に覚一本(語り本系のうちの一方系の一種)は、その奥書から語り の定本として固定的に捉えられ、権威性が説かれてきた。しかし、当研究により、覚一本の本文も、規模は小さいものの流動していることが明らかになった。しかも、他の一方系の本文を参照して手を加えている。覚一本の本文の不完全さに、改めて注目すべきである。覚一本本文の権威性・固定性は再考が必要となる。また、覚一本を溯る形態は、覚一本を下るとされてきた一方系本文にも見いだされる。覚一本を含めて一方系諸本を等価に並立的に評価し、交互に柔軟に影響しあっていたと考えるべきである。

研究成果の概要(英文)：Although there are many different extant written versions of The Heike monogatari with textual variations, the Kakuichi-bon has been thought to be an exceptionally fixed and authoritative version without textual variations because of its colophon. However, it is evident that there are small textual variations in the text of the Kakuichi-bon. Furthermore, the text of the Kakuichi-bon has been revised, referring to other Ichikata versions. So, further observation should be made on the incompleteness of the Kakuichi-bon text. It is necessary to reconsider the authority and fixed nature of the Kakuichi-bon.

In addition, although the text of the Ichikata versions has been thought to originate from the Kakuichi-bon, some text shows an aspect which can be traced beyond the Kakuichi-bon. It is necessary to evaluate equally and collaterally the Ichikata versions including the Kakuichi-bon as it can be thought that those texts have influenced each other collaterally and flexibly.

研究分野：日本文学、中世文学、軍記物語

キーワード：日本文学 中世文学 平家物語 本文 諸本 覚一本 受容

1. 研究開始当初の背景

『平家物語』諸本のうち、最も完成度の高いと評価される覚一本は、その識語から応永4年(1371)の制定とされているが、現存する代表的な6伝本の中で、江戸時代前期を遡るものはない。覚一本伝本の本文系統の研究は1950年代に渥美かをる等が先鞭を付け、山下宏明がによって修正が行われ(『平家物語研究序説』1972年 明治書院 に集成)、確定した。しかし、私はその系統論に疑問を抱き、古い形態を持つとされた龍谷大学本よりも、後期とされた高野本の系統の方が古いと考えた(「覚一本平家物語諸伝本の本文流動 - 伝本分類の再構築 - 」、「国語国文」77巻4号、平成20年)。

本文系統を考えるとということは、「覚一本」本文に揺れがあることを意味する。しかるに、覚一本本文の流動性は等閑に付され、本文の絶対性ばかりが喧伝されてきた。そこで、覚一本本文の流動性を再検討し、その意味を考えることが急務と考えた。それは、覚一検校制定という識語の有効性や権威性への疑念を晴らし、また拘束性の限界を明かしてくれるはずである。

次いで、現存覚一本を遡る形態が、従来後期一方系諸本とされてきた諸本(京師本・下村本・流布本など)からうかがえることを指摘した(「覚一本平家物語遡行の試み 巻四「巖島御幸」「還御」を手がかりに」、「国語と国文学」85巻11号、平成20年)。制定以前の覚一本の姿を解明することは重要であるが、一方系の中で覚一本が最も古いとされてきたために、具体的な方策は見つからず、周辺の他系統の諸本(屋代本、百二十句本等)を用いて考えざるを得ず、定説も見ていない。よって、これについても、新たな方法を模索することができるのではないかと思われる。

2. 研究の目的

本研究では、伝本の発信する情報を汲み取ることを優先課題とする。伝本調査と、そこから導き出される成果の蓄積を重視し、現存覚一本の本文を可能な限り遡ることを目的とする。また、覚一本系統の伝本間の本文流動を検討することによって、「覚一本」とはなんだったのかを明らかにする。本文の完成度や識語が覚一本の権威を幻想させているのではなかったか。新たな視角から覚一本の本来の姿を取り戻すための道筋をつける。

3. 研究の方法

- (1) 京師本系統の伝本調査と善本の確定
- (2) 覚一本主要伝本の調査と書写制作状況の考察
- (3) 後期覚一本系統の伝本のリストアップと調査
- (4) 京師本・覚一系諸本周辺本文と現存覚一本との本文異同調査

4. 研究成果

- (1) 京師本系統の伝本調査と善本の確定
まず、国会図書館本、駒澤大学所蔵本、京都府立総合資料館本(2種)の調査を行った。・については写真を取り寄せ、研究補助を大学院生阿部昌子(現在は非常勤講師)に依頼し、校合を中心としたデータ整理を行なった。従来の研究成果をほぼ再確認し得た。の1種には本文に若干の異同があり、更に精査する必要がある。また、章段の区切り方、章段名の付し方などの伝本による本文の相違はかなり部分的に現れる。この結果から、語りとの関係を考慮する必要があるかとも思われたが、書写者(改変者)の嗜好を考える必要もありそうである。

京師本系統の伝本は数多く残されており、善本を確定するには至らなかったが、書写に厳密性はなさそうであるとの見通しは立っている。

(2) 覚一本主要伝本の調査と書写制作状況の考察

23年度は、覚一本主要6本のうちで、下位に位置づけられている西教寺本・龍門文庫本の調査に主眼を置いた。西教寺本は写真撮影が許可され、研究環境が整った。また、孤本と思われていた龍門文庫本に、現存不明であるが、類本があることがわかった。従来の研究では不明であった点や、考察の行き届かなかった点の解明がかなり進み、両本の関係・他諸本との関係などについて、予想以上に研究を進めることができた。両本が他の一方系の本文によって混態（改訂）が行なわれているとの見通しに確信を持つに至った。

24年度は龍門文庫本の調査に重点をおき、それと共に新たに、龍門文庫本の類本を求めた。『古本平家物語書抜』『那須家所蔵平家物語目録』を手がかりに、龍門文庫本奥書の「文安三年」書写を持つ平家物語が、江戸時代には複数存在したことを突き止めた。その調査のために、栃木県立文書館、那須与一伝承館に赴いた。また、古書目録から、昭和20年代までは確実に存在していたことも判明した。更に、西教寺本も文安三年奥書を有していた可能性を指摘した。

25年度は、「文安三年本」と考えられる現存伝本三本（西教本・龍門文庫本・天理本（旧田安家本））の本文を精査することにより、覚一本伝本の本文の流動の実態の一端を明らかにした。調査の必要上、再び龍門文庫に赴いた。また、天理本は取り合わせ本であることも判明した。単純な書写関係にあるのではなく、一本ごとに独自の校訂を重ねている。しかも、校訂に際しては、別種の一方系の本を用いている。これは覚一本の奥書の権威を疑わせ、本文の固定性への信仰も揺るがせる。逆に、覚一本本文への疑念を出発点とした校合作業が窺える。従来の研究は、覚一本に対する幻想を過剰に抱いていたのではないかと、とも考えた。

26年度は引き続き龍門文庫の調査を行った。また新たな覚一本伝本の存在が明らかになった。

27年度は新出伝本の調査を中心とした。新出伝本からうかがえる本文流動には、二点の大きな方法がうかがえる。第一点は、覚一本にはない章段を増補していくこと、第二点は細かな文節、あるいは単語レベルでの改編を行なっていくことである。これらには、伝本毎それぞれに手元にある、覚一本ではない他の一方系の本文（京師本が一番近い）が用いられている。よりよい本文を作る、あるいは既知の本文に近づけるために手を加えていると思われる。つまり、覚一本本文には不満があった、もしくは手を加えることも可能であったと理解できる。覚一本の権威性が説かれて久しいが、少なくとも、本文の権威性については再考すべきである。

覚一本は一方系の最古にして最高の本文とは言えない。少なくとも室町～江戸時代の読者は、覚一本の本文についてはそれほどの特権性を見いだしていないことを再確認できたのが当研究の成果である。この成果をもとに、覚一本を遡行し、その成立を考えることになる。それには、今まで覚一本から直線的に下って成立していったとされてきた他の一方系の諸本を検討しなくてはならない。

(3) 後期覚一本系統の伝本のリストアップと調査

23年度に先行してリストアップをし、陽明文庫本を調査した。覚一本系統が予想以上に流動性を持っていることを確認し、西教寺本・龍門文庫本の本文流動との共通性を見いだした。覚一本系統伝本本文の固定性を疑うに十分な調査結果を得た。また、金沢市立玉川図書館所蔵「松雲公採集遺編集類纂」収載の覚一本の永禄年間・天正年間の書写奥書を調査し、覚一本の16世紀の流布状況を確認した。

24年度は内閣文庫本・天理(一)本(以下、「旧田安家本」)・天理(二)本の調査を行った。複写を入手することが出来、調査が進んだ。中でも、上記(2)と連動するが、西教寺本・龍門文庫本系統にあるとの指摘を受けてはいても調査の不完全だった旧田安家本が西教寺本系列の本文形成を考える上でヒントになることがわかり、研究補助を阿部昌子に依頼して、本文異同データ作成を行った。また、その調査の必要上、再び龍門文庫に赴いた。

25年度には、覚一本・京師本・流布本の校合作業を、研究補助の阿部昌子の協力を得て行った。語りとの関係を予想させる繰り返し表現、フレーズ単位での移動など、先後関係などは見極めがたいものの、考えるべき要素が浮かんできた。

総体的に、覚一本の伝本の流動性に、研究者が目をつぶってきただけであるとの明快な結論が出た。

(4) 京師本・覚一系諸本周辺本文と現存覚一本との本文異同調査

24・25年度は鎌倉本を基点として覚一本・屋代本などとの距離を測り、従来の研究では触れ得なかった、底本の素性を探る研究を行い、結果、屋代本の新しさをあぶり出すこととなった。百二十句本の検討の必要性も確認した。

26年度は、百二十句本、特に最も古いと考えられる斯道文庫本の調査が必要であると考え、まず、本文翻刻から始めている。

これは本研究では終結していない。更なる方法を見つける必要も感じている。

(5) その他

26年度に所属学会(中世文学会)の大会シンポジウムで、能と平家物語について報告をすることになった。そこで、15世紀前半の平家物語の流布・享受の実相を、世阿弥作の能

作品の分析を通して考察をした。

世阿弥が語り本系を多用していることに注目し、使用諸本本文の特定を試みたところ、15世紀前半の覚一本『平家物語』の流布状況を実態的に把握することができた。世阿弥が用いた覚一本は、現在の覚一本に非常によく似ているものの、同じではない。

「覚一本」と称される『平家物語』は、唯一絶対のものではなく、本文は微妙に揺れていた。覚一本の周辺に、類似してはいるものの同一ではない本文が多く流通していた。覚一の権威は本文を固定化させるものではなかったと考えられる。また、八坂系も覚一本も、あまり意識的な区別がなされているとも思われない。

いっぽうで、世阿弥は読み本系(源平盛衰記と思われるが、現在の盛衰記ではない)も用いている。覚一本などの語り本系とは異なる『平家物語』として意識され、作能に新たな舞台設定や詞章の表現世界の素材を提供している。同じ『平家物語』であっても、別種のものとして意識されていたようである。

このような研究成果を通じて、覚一本『平家物語』の遡行について考察を行った。

(6) まとめ

『平家物語』には多くの異本があり、その本文は大小様々に揺れているが、例外的に覚一本(語り本系のうちの一方系の一種)は語りの定本として固定的に捉えられ、覚一検校制定という奥書の文面から、覚一本の権威性が定説化していた。しかし、伝本という内部資料、また、覚一本を用いた能作品という外部資料を詳細に分析することから、覚一本の本文も、規模は小さいもののやはり流動していること、類似しているが同一ではない覚一本が多く生まれていることを明らかにできた。これは、覚一本本文から権威性・固定性を失わせる結果となった。しかも、覚一本は一方系の最古のものではなく、覚一本以前の

形態は京師本などの覚一本を下ると考えられてきた一方系本文にも見いだされる。従来考えられてきた、覚一本を頂点として本文が直線的に下降していくという方向性から脱却し、どの本も等価に、並立的に存在し、交互に柔軟に影響しあっていたと考えるべきである。

特に覚一本の伝本では他の一方系の本文を参照し、手を加える作業が多く見られた。覚一本の本文の不完全さに改めて注目すべきであろう。

次なる課題は、覚一本以外の他の一方系の諸本、また、他の語り本系本文（百二十句本など）も含めて、どのように覚一本及び語り本系（一方系）の成立を探るのか、その方法論を模索し試行することである。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計7件）

櫻井陽子、覚一本平家物語の書写と本文 - 新出伝本の紹介から「小宰相」「宗論」の問題に及ぶ -、駒澤国文、査読無、53号、2016、67-105

<http://repo.komazawa-u.ac.jp/opac/repository/all/35714/rkb053-05-sakurai.pdf>

櫻井陽子、世阿弥の時代の平家物語、中世文学、査読無、60号、2015、p19-28

櫻井陽子、世阿弥の時代の平家物語 その二 - 読み本系を中心に、駒澤国文、査読無、52号、2015、1-20

<http://repo.komazawa-u.ac.jp/opac/repository/all/34826/rkb052-01-sakurai.pdf>

櫻井陽子、覚一本平家物語の伝本と本文改訂 その二 - 西教寺本・天理本・龍門文庫本の検討から -、駒澤国文、査読無、51号、2014、1-30

<http://repo.komazawa-u.ac.jp/opac>

[/repository/all/33773/rkb051-01-sakurai.pdf](http://repository/all/33773/rkb051-01-sakurai.pdf)

〔学会発表〕（計1件）

櫻井陽子、世阿弥の時代の平家物語（シンポジウム「南北朝期・室町期の文学と諸芸能」）、中世文学会 平成二十六年春季大会、2014年5月24日、早稲田大学（東京都新宿区）

〔図書〕（計2件）

櫻井陽子、汲古書院、『平家物語』本文考、2013、600

櫻井陽子、他 和泉書院、『軍記物語の窓 第四集』（担当論文：覚一本平家物語の伝本と本文改訂）、2012、492（担当：1-24）

6. 研究組織

(1)研究代表者

櫻井 陽子 (SAKURAI Yoko)

駒澤大学・文学部・教授

研究者番号：60211934

(2)研究協力者：

阿部 昌子 (ABE Syoko)

駒澤大学・文学部・非常勤講師